地歴公民科「　日本史Ｂ　」授業実践紹介

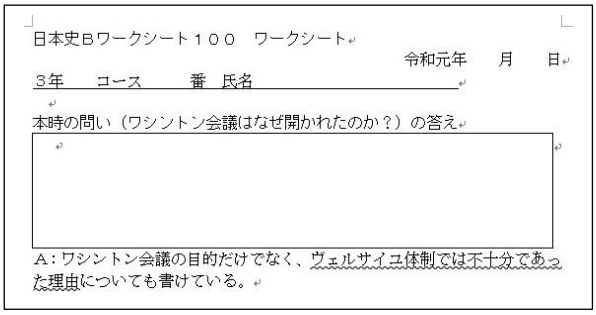
授業者：下垣　豪
学　年：３年　普通科
単元名：ワシントン体制

単元のねらい（７つのチカラ：自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力）

①第一次世界大戦後の国際協調外交の基本的事項について理解する。
②問いの答えを考えることで、ワシントン体制についての理解を深める。

単元の流れとパフォーマンス課題

第１時　パリ講和会議とその影響
第２時　ワシントン会議と協調外交（本時）
第３時　社会運動の勃興
第４時　普選運動と護憲三派内閣の成立


日本史Ｂワークシート１００　ワークシート
令和元年　　月　　日
３年　　コース　　番　氏名
本時の問い（ワシントン会議はなぜ開かれたのか？）の答え
Ａ：ワシントン会議の目的だけでなく、ヴェルサイユ体制では不十分であった理由についても書けている。

【単元の構成】

本単元は、ヴェルサイユ体制、ワシントン体制という国際的な協調体制と世界的な民族運動の高騰に着目し、国際社会における日本の立場や対外政策の変化について考察するとともに、民主主義的風潮の高まりの影響を受けた社会主義運動、労働運動、女性の地位向上を目指す運動などの動向についても理解することを目的としている。

【授業の流れ】

①本時の問いを確認する。
《本時の問い》「ワシントン会議はなぜ開かれたか？」
②各自教科書を見て、ワークシートの空欄に、適切な語句を記入する。
③説明、発問をしながら、ワークシートの空欄にあてはまる語句を確認する。
④問いの答えを考え、回答用のワークシートに記入する。
《パフォーマンス課題》
⑤問いの答えを共有し、回答例を示し、問いについての理解を深める。

評価　～パフォーマンス課題のルーブリック～

A	本時の問いに対して、ワシントン会議の目的を、ヴェルサイユ体制では不十分であった理由についてもふれて、答えることができる。
B	本時の問いに対して、ワシントン会議の目的を答えることができる。
C	本時の問いに答えることができない。

生徒の変容と課題

《考える力》

大半の生徒が、日本史Ｂの学習活動について、知識を身につけることが中心であると考えているため、

歴史的事象を考察するところまで学習が深まらなかった。そこで、歴史的事象の考察につながる問いを答えることに目標をしぼり、すべての単元において、問いの答えを考える場面を設けている。

毎回、自分の理解を文章で表現していく中で、自分なりに考え、それを表現することに対して、慣れてきている様子は見られる。生徒の記述内容には、個人差があるが、事象の前後関係などを的確にとらえ、高い確率でＡ評価を得ることができる生徒もおり、考える力の伸長が感じられる。一方で、問いに対する関心を高めることができず、意欲的に考察することができない生徒も少なくない。

このような二極化が大きな課題であり、８月と１０月に行った教科別ワークショップにおいても、岡山大学大学院の桑原敏典教授から、問いの設定の仕方などに工夫が必要であるという助言をいただいている。この助言を来年度以降の取組みに活かしていきたい。

単元を通して身につけてほしいこと

歴史的事象について正確に理解した上で、過去、また現代の歴史的事象と比較するなどし、そこに見られる問題点に気づくことができる歴史的思考力を身につけてほしい。科目全体の学習を通しては、①現代社会でおこる様々な出来事に内在する問題点に気づくことができる、②将来どのような問題が発生する可能性があるかを予測できる、①②を通して主権者の基礎的な力としての歴史的思考力を自身の物事に対する見方・考え方として定着させる、以上のことを期待している。

実践の背景

本実践は、単元「ワシントン体制」全３時間の授業のうち、その第１時の、大戦後の国際秩序であるワシントン体制についての理解を深めることを目的に実施したものである。世界的規模の戦争が二度起こることは生徒も知識として持っている歴史的事実だが、本実践では、第一次世界大戦後の国際秩序には当初から問題があり、その後の第二次世界大戦を回避するには不十分な体制であったことを理解することを目的としている。

日本史Ｂでは基礎的な歴史的知識の習得に加え、歴史的事象の学習を通じて現代社会の諸課題を解決するために必要な歴史的思考力を培うことを目的としているが、通常の学習では知識の習得中心になりがちである。そのため単元ごとに歴史的事象の知識をふまえ、思考・判断を必要とするパフォーマンス課題に取り組んでいる。

授業改善のアプローチ

昨年度はグループ活動を取り入れた取り組みを行ったが、授業内容の振り返りにとどまる内容で、そこで得られる理解が、十分に学ぶ値打ちのあるものとは言えなかった。昨年度の反省をふまえ、今年度は授業の目標に代えて、授業ごとに問いを設定し、その問いの答えを考えることにポイントをしぼり、理解を深めることにつながることを期待している。

単元のヤマ場となる授業場面

ヤマ場となる授業場面は、一つは、問いの答えを生徒が考える場面であるが、もう一つは、問いの答えを共有し、お互いの回答を確認し合いながら、自分の回答について再考するところである。この活動により、自身の理解が深まることを目的としており、学ぶ値打ちのある部分であると考えている。また新たな気づきや理解を深めることにつながると考えている。

授業のルーブリック

	2	1	0
Ⅰ関心・意欲・態度	教科書を精読してワークシートに率先して取り組むなど、本時の学習活動に意欲的に取り組めた。	ワークシートの記入など、本時の学習活動を授業内に終えることができた。	本時の学習活動に集中して取り組めなかった。
Ⅲ技能・表現	本時の問いについて、多角的な理解の上で、答えることができる。	本時の問いにおおむね答えることができる。	本時の問いに答えることができない。